

楽園の楽屋

2
0
1
2
年

上
演
台
本

作
・
演
出

芹
川
藍

登場人物

橘 栗林 桂木
佐和子 園子 秀子

天国へ向かうための楽屋か…

それとも地上に舞い降りる天使たちの楽屋なのか…。

本番を控えた楽屋に集う役者三人。

軽口を叩き合い、化粧をしながら、身体と心をほぐし、その空間に慣れ親しませていこうとする。
何十年も繰り返してきた準備の時間…。

・・・が、今日はいつもと同じではなかった。

舞台への準備とは別に、ある心の準備を始めなければならい一人の役者。

幕が開いたその向こうにある楽園とは何だったのか。

深海の底のような蒼き光の中、うごめく影。
生と死の挟間に漂うがごとく。
終わりに向っているのか、始まりに向かっているのか。
やがてその微かな光さえも消えてゆく。

暗やみの中にひっそりとうずくまっている人の気配がする。
悪夢にうなされているような、押し殺した声が聞こえて来る。

栗林

…この罪の悪臭、天にも達しよう。人類最初の罪、兄弟殺しを犯しこの身、どうして今さら祈ることができよう。祈りたいと思う心はいくら強くとも、それを上まわる罪の重さに押しつぶされる。

むさぼるように食べている気配。

栗林

人が祈るのはなんためか？ 一つは罪に落ちぬよう、もう一つは罪に落ちたものが許されるように祈る。そうではないか？ とすれば天を仰ごう。犯した罪は過去のものだ。だが、どう祈ればいい？ 忌わしい人殺しの罪を許したまえ。人はどうして年をとると、自分の手をジツとみつめることが多くなるんだらう、私だけ？ どうして私の生命線は、こんなにも短くて、薄いんだらう？ どうしてマグドナルドのハンバーガーは、こうも不甲斐なく、やわらかいのだ

ろう？人はどうして悲しくなると、海を見つめに行くのでしょうか。港の坂道駆け下りるとき、涙も消えると思うのでしょうか。

明かりが点くとうづくまっていた一人の役者、栗林園子が夢から覚めたように我に戻る。入り口にもう一人の役者、橘佐和子が薔薇の花を持って佇んでいる。

ここは楽屋。

役者達が舞台に向かうまでの特別な時間を過ごす場所である。

橘　　んんんんんんん、いた、おとととと…あつつつ…

栗林　どうしたの？

橘　　いたたた…ちよっと…なんか変なふうに捻っちゃったみたいで…

栗林　また？今度は何？

橘　　シャンプールのツブツブがなかったから…

栗林　ツブツブ？

橘　　シャンプールの。

栗林　シャンプールのツブツブ…はあ？

橘　　知らないの？

栗林　ツブツブ？シャンプールの？

橘　　ほら…リンス付けたら、なんか、やけに泡立つなあ…え、ちよっと、これシャンプーじゃな

い！ っってことあるで…

栗林
ある！

橘
だから、どっちがシャンプーでどっちがリンスかって区別するのに…

栗林
ああ、あのブツブツのことか？

橘
ツブツブ。

栗林
ブツブツ。

橘
だから、そのツブツブがなかったから、ああ、こっちだって、こっちやったら…あたたた…

栗林
もう、本当、ヤワなんだから…

橘
んんん、そ、そうなの、そうなの。

栗林
あ、そうだ！ ちよっと！ こっち来て。

橘
何？

栗林
いいから、こっち！

橘
はいはい。

栗林
ここに座る。こっち向きじゃない、そっち向いて。

橘
はいはい。

栗林、座った橘の首に手をかける。

橘
ちよ、ちよ、ちよ…

栗林
どっち向きが痛いのか？

橘 こっち向きが…（指差し）

栗林 （橘の首を持って）こっちか…

橘 ちよっ！ ちよっ、ちよっちよっ！

栗林 ああ、こっち向きが痛いのか？

橘 そうだってば！

栗林 あのね、痛くない方に回してどうにかすると治るってどっかの誰かが言ってたよ。
橘 どうにかするって、どうよ？

栗林 いいから、とにかく痛くない方に回してみて。

橘 んん…こっちな…

栗林 こっちか。じゃ、こっちに向けて…

橘 …（信頼していないわけではないが、力が抜けない）…

栗林 …ちよっとお！ 力抜いて…

橘 んん…

栗林 （回そうとして）力！ 抜く！

橘 はい。

栗林 ほらほら、痛くない。痛くないよお…

橘 え？ おまじない？ イタイノイタイノトンデケケ的な？

栗林 黙って！

橘 はい。

栗林 息！

橘 はあ？

栗林 息！吐くの！はい〜！

橘 はい。(吸おうとする)

栗林 吸うんじゃない！吐く、吐く！いい？

橘 わかった…

栗林 はい、息吐いてえ。

橘 (息を吸う)

栗林 だから、吸うんじゃないくて、吐くの！

橘 だって、吐く前には吸わないと…

栗林 あなたは正しい！はい、吸ってからの…吐くううう…

橘 (吐く) はああああ

栗林 どうお？

橘 え？どうって…(回してみる) あたあたた…

栗林 あれ？おかしいな？

橘 ちよつと、怪しい情報なんじゃないの？

栗林 ええと…確か…痛くない方に動かしながら息を吐くうう…でいいはずなんだけど…

橘 はずう？

栗林 もう1回。真剣に！

橘 誰が真剣じゃないのよ。

栗林 しー！静かに、冷静に。

橘 冷静ですけど、私。

栗林 さ、行きますよ。痛くない方に回しながら…息を吸ってからの…吐いてえええ

橘 (吐く) はあああああ…

栗林 どうよ?

橘 んんん…(恐る恐る首を回してみる)ん!…あ、あれ…あああ…(思いの外、スムーズに動く)

あ、ら…ははは…いいみたい…あ、ら、あら…(栗林の食べかけのハンバーガーが目に入る)
ちよつとお、またハンバーガー!?

栗林 また薔薇?

橘 そっ!

橘、立ち上がり花瓶に薔薇を挿す。

橘 一、二、三、四…十六本目。

栗林 毎日、毎日ご苦労なこって。

橘 気持悪いよね。

栗林 一日一本ってのが?

橘 それもだけど、造花ってのが。

栗林 でも生花だと千秋楽にや最初の一本は枯れるよ。

橘 まあね。

栗林 だけど、最近の造花ってすごいよね。本物ソックリ!

橘 ソックリすぎて気持ち悪い。

栗林 うゝん、変化がないところが嫌だわ。香りがしないのも嫌。触った感じも嫌だよ。

橘 ホコリをかぶるのが嫌。

栗林 …変化がないものはホコリを被るか…

橘 誇りとホコリは一緒だよ。

栗林 何言ってるの？ ホコリとホコリ？

橘 ホコリと誇り。

栗林 ああ、ホコリと誇りか…。

橘 そう、誇りと埃。

突然扉が開く。サングラスをかけたもう一人の役者、桂木秀子が走り込んで壁に手をつき肩で息をする。

桂木 優しさに応えるのは疲れる〜！

栗林 は？

桂木 だあ〜から、やさしさに応えるのは疲れる！

橘 なに？

桂木 今、駅の地下でエレベータを待ってたのよ。そしたら「開きましたよ」って。「あん？」って横向いたら、白髪の上品な婦人が笑みをたたえてるの。そんでもって、もう一度「開きましたよ」って。そしたら開いてたのよ。

栗林 何が？

桂木 エレベーターがよ！

橘 はあ…。

桂木 もう、ゆうべ眠れなくて、眠れなくて…電話があつて…

栗林、橘、桂木に何かがあつたことを察したように注目する。

桂木

（二人の注目をかわすように）飲んでたから、ホラ…「浜夕」で飲んでたから…もう疲れちゃつて…こう、手をついてたのね。そしたら、あの点字のツブツブがあつたのよ、手の下には。もう一瞬でわかつたわよ、この人は優しさで言ってるんだって。「あ、ありがとうごさいますって、こうやって中に入ったのよ。（おぼつかない足取りでエレベーターの中に入っていく再現をしているらしい）…こうやって手すりを持ってちよっと上目づかいで佇んでいたのよ。そして、「開きましたよ」って。だから「ありがとうごさいます」って丁寧におじぎして、二、三歩歩いておそろおそろ振り返ったら、まだこっちを心配そうに見てるじゃない！ もうもうもう、またこうやってヨタヨタ歩いて、その自販機の角からダッシュで走ってきたのよ。ああ、疲れたあ、ああ、優しさは疲れれるわ。

桂木

橘 そんな、サングラスなんかしてるからじゃない。だつて目がパンダなんだもん。隠さなくちゃ、隠さなくちゃ！

桂木、サングラスを外すと目の下が真っ黒。

栗林 またそのまま寝たの？

桂木 私の父が言っておりました。「汚れて人は死なん」

橘 死にはしないわ。

桂木 ね、ね、死なないよね。

橘 ちよつと目が真っ赤よ。

桂木 ああ、飲み過ぎ、飲み過ぎ。

橘 目玉には化粧できないんだからね。

桂木 あー！ ね、どう思う？ どう思う？

栗林 何が？

桂木 脳死でき、いろんなものあげるじゃない。

橘 あげるって？

桂木 心臓とか、肝臓とかあげるじゃない。

栗林 ドナーのことでしょ。

桂木 そ、ドナーよ、ドナー。ね、知ってた？ 脳死って判定されたのに、全身麻酔をかけてから臓

器を取り出すんだって。この前テレビで言ってた。

橘 だから？

桂木 脳死だよ、脳死なのになんで麻酔？

栗林 痛いんじゃない？

桂木 うわ、やっぱり痛いんだあ。

橘 へえ、脳死って痛点生きてるの？

桂木 ツウテン？

栗林 ねねね、あつたよね。外国映画であつたよね。戦争で怪我して両手両足がなくなって、顔もえぐられて包帯でグルグル巻きで芋虫みたいになって…

橘 そう！ ただ寝かされてるだけなの…あ、ベトナム戦争の…

栗林 そう、麻酔もしないで手術するの。意識はないと思ってるから。

橘 でも、「ギャアー！」って叫ぶんだよ、でも、声にならないんだよ。

栗林 そしたら、ツーツーツー、モールス信号、SOS、ヘルプミー…

橘 そ、だから意識はあるんだよ。だから、痛いんだよ！ ギャアー！

三人 いやっただあゝゝゝ！！！！

三人、想像を絶する苦痛を及ばずながらも想像してしまう。
時を刻む時計の音に我を取り戻す。

桂木 ……ってことは気持かあ。

栗林 は？

桂木 脳死の麻酔。本当は痛くないんでしょう？ だったら気持ちじゃない。

栗林 誰の？

桂木 お医者さんのよ。

橘 やさしさってことかあ。

栗林 やさしさって言うより、罪悪感じゃない？

橘 自分をフォローしたくなるんだよ。

桂木 ああ、そうかあ。

栗林 ね、それってこれと同じ？ ある小学校でブタをペットで飼ってたの。で、その子たちが卒業する時にこのブタを…ピーちゃんっていうんだけど…どうするかって。

橘 ああ、あの映画の。

桂木 ああ、映画の。

栗林 いや、実話。

桂木 ああ、実話。

橘 だから映画のでしょう？

栗林 いや、だから実話の映画。

橘 ああ、実話の映画。

桂木 はい！ 先生！ 私たちのピーちゃんを食べるなんてできません！

一瞬にしてそこは小学校の教室風景。

橘 はい！ そうよ、そうよ、ピーちゃんは、ピーちゃんは私たちの友だちです。一生懸命育てたんです。

栗林 はい！ だけど、だけど、ピーちゃん、かわいそうだけど、ピーちゃんを食べるといのはピーちゃんを自分の身体の中で生かすということではないのですか？

桂木 はい！ ピーちゃんを自分の身体の中で生かすって何ですか？

橘 はい！ 私たちのピーちゃんが自分の栄養になるってことですか？

桂木 はい！ ピーちゃんが自分の栄養になるって何ですか？

栗林 だって、それがピーちゃんの運命でしょう

桂木 運命って何だよ！？

橘 そうよそうよ、食用センターが運命ってこと？

栗林 そうよ、だってピーちゃん、ブタに生まれたんだもの。

桂・橘 ブタってなによ！ ブタってなによ。ブタって！

栗林 だって、ブタじゃない。

橘 ブタだけど…

桂木 先生、命の長さってだれが決めるのですか？

栗橘 そうよ、そうよ、いったいどこのどなたが決めるのですか？

橘 えくん(泣きまね)食用センター送りなんてかわいそう！ かわいそう！

三人 ピーちゃんかわいそう、かわいそう、ピーちゃん！

三人、どうやら「ピーちゃん物語」に決着をつけようとしたようだ。それぞれ、自分の化粧前に座り、化粧を始める。

橘 「ピーちゃんかわいそう〜」って家に帰ったら…「お母さん、今日の夕飯ナニ？」「豚の生

栗林 姜焼きよ」「わー！ ヤッター！」
まっ、そんなもんよ。

桂木 ねえ、綿棒ない？

栗林 (ポーチから綿棒を取り出す) あるよ。はい。

橘 ちよつと何？ その袋、ボロボロじゃない。新しいの買えばあ？

栗林 いいじゃない、好きで使ってたんだから。

橘 臭いんじゃないの。

栗林 ちゃんと洗ってます。

桂木 いいじゃない、お母さんの手作りだもんね。

栗林 東京に出てくるとき、作って持たせてくれたの。

橘 そうなんだあ。

桂木 もう四十年ぐらい前よね。

栗林 いいじゃん、いいじゃん。

三人はそれぞれ化粧を続ける。

桂木 …ねえ、何年前だった？ お母さん。

栗林 ん？

桂木 お母さん。

栗林 ああ、すごい前。

橘 すごいってえ？ 忘れたの？

栗林 …だからあ…えっと、同い年。

桂木 へ？

栗林 だからあ、お母さんが死んだ歳と今の私が。

桂木 今のあなたと？ へえ、若かったんだねえ。

栗林 そう、若かったの

桂木 で、何年前になるの？

栗林 んんっと…あの時、芝居の本番中で…何の芝居だっけ？…佐和ちゃん、何の芝居だっけ？

橘 え、私知ってるんだっけ？

栗林 ああ、知らないんだっけ？ ちょっと待ってえ…お母さんが私を生んだのが三二歳だからあ…

桂木 佐和ちゃんどこ、いつだっけ？

橘 え、何が？

桂木 お父さん。

橘 ああ、お父さん。ええと、公演の直前だったっけ？

桂木 え、いつの芝居だっけ？

橘 …(園子に) 何の芝居だっけ？

栗林 私が知ってるんだっけ？

橘 知らないんだっけ。

桂木 そんな忘れるもんだっけ？

三人 …だっけ…

栗林 ……ね、ね、死ぬっていなくなるってことなのよ。

桂木 そうだよねえ。

橘 どこを探してもいないってことなんだよねえ。

栗林 もうさわれないうってことなんだよ。だから、死んだ母さんの手をずっと握って、絶対忘れないぞって。私ね、今でも最後の母さんの手のぬくもり思い出せる。

桂木 へえ、覚えてるんだ？ 今も覚えてるんだ。

栗林 覚えてる。すごく温かった、その時はね。で、最後は石。

桂木 へえ、石…

橘 …ウチなんてね、お父さんの入歯入れるのを忘れてて。もうカッチンコッチンになってるのに、葬儀社の人「入れましょう」って。ガンガン、ガンガンって。もうあれはモノよねえ。

桂木 へえ、モノ…。

栗林 そうよねえ、布団に寝かされて、どんどんモノになっていくよねえ。

桂木 じゃ、悲しくはないの？

橘 …悲しくないわけではないけどね。その時はねえ、もうバッタバタだしね。お通夜、お葬式、火葬場ってね…なんだろうね。やっとお父さんにストレートに話しかけられるような気がした。ふん。

桂木

一人一人によぎる遠い日の感触を味わっているような…

時を刻む音に、今はそんな思いに身を委ねる時間ではないことに気がつく。化粧を再開。

桂木、何かの知らせを待つのか、携帯の着信を見る…何も来ていないようだ。

桂木 …あゝあ、結局、父さん、私の芝居、見ないんだろうなあ。

橘 …ああ、遠いしね。

栗林 え？うそ！ホラ、あったじゃん。これ父さんが持ってきたって。タカセ飴もらったじゃん、ね、佐和ちゃん！

橘 ああ、そうそう、あのタカセ飴。もらったもらった。歯にくっつく飴。園ちゃん、前のさし歯取れちゃったじゃん！

栗林 アッ！そうそう、取れた取れた、ポンドでくっつけて芝居に出た。（大笑い）

橘 あれ、秀ちゃんのお父さんだったの。

桂木 あ…うん。ついでだったんじゃないかな。

橘 ついでって？

桂木 田舎から出てきたの、用事があって…あのタカセ飴、芝居が終わった後、受付に行ったらポツンとテーブルの隅に置いてあったんだ。

橘 なんて。

桂木 木村恒子様って書いてあったから、父さんの字で。

橘 本名じゃない…。

栗林 あ、そうだ、木村恒子だ。

桂木 そうなの。だから誰もわからなかったと思う…本名なんて…ばかみたい…。

橘・栗

：

栗林 だったら見たんじゃないの。

桂木 だって、その後なんにも芝居のこと触れないんだよ、父さん。まあ、私、あん時いい役やってなかったし…。

栗林 あ、あの時のスカタン演出家……

橘 ああ、直前で三分の一カットしたんだよね。

桂木 父さんにわざわざ聞きにくいじゃない。

橘 無邪気なふりして聞いたら良かったじゃない「どうだった？」って。

桂木 「どうだった？」じゃないでしょう。「見たの？」でしょう。

栗林 問題はそこか……。じゃ、やっぱり何気なく聞いたら？「見た？」って。

桂木 無理無理。無邪気なんかムリムリ、何気なくなんかムリムリ……やっぱり聞かずにまじになっちゃうな。……結局、興味がなかったんじゃないかなあ。

栗林 そんなことないんじゃない。

橘 ねえ、これからだって、ねえ！いつか、ねえ！

桂木 ムリムリ。もう歳だもの……

栗林 どっちが？

桂木 オヤジが、でしょ！

栗林 ああ。

橘 じゃあ、九州……八代公演やればいいんじゃない。

桂木 ええ？私が？ムリムリ。

栗林 そうよ、聞いとけばよかったって言わずにさ……

桂木 ムリムリ。どっちもムリ。

栗林 ……私……聞いとけばよかった。

橘 誰に？

栗林 お母さんに。

橘 何を。

栗林 ちらし寿司の作り方。

橘 ちらし寿司…。

栗林 うん、あと、稲荷寿司に、フルーツポンチ。

橘 フルーツポンチ？

栗林 うん。牛乳を寒天で固めて、缶詰のみかんとかサクランボとか入れるの。自分でも作るんだけど、どうしてもあの味にならないんだよねえ。

橘 へえ。

栗林 ああ、それとリンゴ、お弁当に入ってたウサギさんのリンゴ。あの微妙な塩加減がねえ。たまにないんだよねえ。…料理じゃないけどね。

橘 横にちよこつとあるアレでしょ？

栗林 ううん、全部リンゴ。お弁当箱にうさぎさんが一個、二個…七個くらい入ってた。

桂木 ふうん、弁当にりんごだけ？

橘 全部リンゴ…？

栗林 うん、リンゴだけ。

桂木 私んちはね、メザシだけ。

栗林 え？メザシだけ？

橘 お弁当が？

桂木 うん。

橘　メザシが並んでるの？

桂木　一匹。新聞紙にくるんであるの。

栗林　一匹のメザシを新聞紙でくるんであるの？

橘　ご飯は？

桂木　弁当箱にギッシリご飯だけ。それに梅干し。

栗林　ご飯と梅干しとメザシが一匹…

桂木　父さんが大好きでね、メザシ。二十匹くらい兄弟たちみたいに並んでるのを買って来るのよ。その内の一匹を弁当に…

栗林　へえ、お父さんが好きなんだ。

桂木　酒のつまみ、酒のつまみ。

橘　ああ、だから秀ちゃん！

栗林　居酒屋で！初めは必ずメザシだよね！

橘　そうだ、いつもメザシ…

桂木　……♪酒はぬるめの燗がいい、肴はあぶったメザシでいい…

栗林　♪チャラチャラチャララン♪　今日も仕事が終わった。悲しいこともある、空しいこともある。ああ、切ない夜空に星がまたたいている。

桂木　♪チャラチャラチャン♪

橘　縄暖簾をくぐると薄暗いカウンターだけの小さな店。そこには篠ヒロ子似の女将さん。「あら、いらっしやい。今夜も冷えるわねえ」

栗林　♪チャラララ♪　チャラランチャラランチャラリラン♪

桂木　「見送りて　戻りし家に娘のぬぎし　スリッパ一足　ひそと残れり」

二人　……

栗林 何それ？

桂木 この前、田舎に帰った時、本棚で見つけたの。父さんの短歌。「見送りて 戻りし家に娘のぬぎし スリッパ一足 ひそと残れり」

橘 「このぬぎし」？

桂木 こ…娘って書いて「こ」。「ムスメの脱ぎし」じゃ、字余りだから。

栗林 「戻りし家にムスメの脱ぎし…」ああ、ホントだ、字余りだ。

桂木 …私が田舎に帰ってて、東京に戻る時、父さんが珍しく前の道まで見送ってくれたことがあったの。その後、父さんが家に入ったら玄関に私が履いてたスリッパが残ってたっていう…「見送りて 戻りし家に娘のぬぎし スリッパ一足 ひそと残れり」

二人 ……

桂木 …もう、こんなこと書かれたらたまらないよね。見たら、昭和五十一年。私、二十六歳よ、二十六歳！

橘 へえ…

桂木 このあいだも電話で、「お前、夜道には気をつける。近頃、若い女の子が襲われてるらしくぞ」だって。いくつだと思ってるのよねえ。「若い女の子」よ「若い女の子」！

栗林 いつまでも子どもはこどもなのよ。

橘 親もいつまでも子どももって思ってるけど、自分も変わらないよね。

栗林 何が？

橘 感覚が。私、今の自分の年齢、信じられない。

桂木 わっかるう。私さ、この前、ギョウギョウ詰めの新幹線の中でイケメンのお兄ちゃんに爽やかに「どうぞ」って席を譲られたのよ。「え？ やだ！ ナンパ？ ナンパ！」って一瞬思ってた…

だけどき、だけどき、私はオバサンじゃん。考えちゃうのよね、このお兄ちゃんは、私のこと、ステキな女性だからって席を譲ったのか、年寄りへの優しさで席を譲ったのか：

栗林 それはオバサンだからでしょ。

桂木 何、オバサンって。

橘 オバサンじゃん。おばさーん！

桂木 私はオバサンじゃない。あの子は私の甥っ子じゃない。

橘 そうだ、そうだ。ハイハイ。

桂木 ……そうよ。だから、わからなくなるのよ。

栗林 ねえ、子どもの頃って、ちよっとしか違わないのに大人に見えなかった？

橘 見えた、見えた。

栗林 ウチの近所に「三宅さんのお姉ちゃん」って人がいたの。

橘 三宅さん？

桂木 お姉ちゃん？

栗林 そう、「三宅さんのお姉ちゃん」。「お姉ちゃん、お姉ちゃん、三宅さんのお姉ちゃん」って呼んでさ、よく神社で缶けりとかして遊んでもらってたのよ。あっ「三宅さんのお姉ちゃん！」

橘・桂 へえ、「三宅さんのお姉ちゃん」

栗林 でも、今から思うと三宅さんのお姉ちゃん、二歳しか違わないの。

桂木 いくつといくつ？

栗林 一〇歳と十二歳。

桂木 四年生と六年生。

栗林 そう。それなのに「三宅さんのお姉ちゃん、三宅さんのお姉ちゃん」って呼んで神社でさあ…
橘 あっ！ そういえば夕べね、帰る途中で神社があったのね。それでふっと入っていったのよ。

桂木 神社に？

橘 うん、そしたらその枯葉が突然燃えだしたの。

栗林 大変じゃない。

橘 そしたら、煙がポーってなって、危ないわねって思ったら、なんかその煙に吸い込まれていきそうになったの。

桂木 誰が？

橘 私がよ。そしたら突然「あなたはこんなところで遊んでる場合じゃないでしょ」って言われたの。

栗林 誰に？

橘 誰かに。

桂木 誰かに？

橘 「あなたはこんなところで遊んでいる場合じゃないでしょ」って。

桂木 それ、誰？

橘 だからあ、この辺にいる誰か。

栗林 この辺？

橘 「あなたはこんなところで遊んでる場合じゃないでしょ」って。

桂木 ……それ、夢でしょ。

橘 ……そう、夢だけど。でも怖くない？ 煙にすくっと吸い込まれそうになったら…

桂・栗 「あなたはこんなところで遊んでる場合じゃないでしょ」

橘 そうよ、煙にすくって乗って…

橘桂栗 「あなたはこんなところで遊んでる場合じゃないでしょ」

突然、空気を裂くように不吉な鳥の鳴き声が渡って行く。続いて場違いに軽やかな

音楽の一節が流れる。劇中のダンス音楽らしい。

三人、その音につき身を委ねてしまう。

突然、音が途切れる。音響スタッフが劇中の音のチェック始めたらしい。

橘 今日、音響さん、早いね。

桂木 そうだね。あ、ねえ、昨日、ルリちゃん来てたね。

栗林 うん。私、挨拶したよ。

橘 ルリちゃん？

栗林 ホラ、この前舞台上で一緒だった…

橘 三条ルリ子さん！ あら、私、会ってない。ルリちゃん、元気だった？

栗林 老けてた。

橘 老けてた？！

栗林 元気に老けてた。

橘 ああ…ルリちゃんっていくつだったけ？

栗林 六十八。

橘 うっそ〜！ もっと上だって思ってた。

桂木 そうねえ〜、七十歳には見えるね。

栗林 うん、見える、見える。

桂木 そうか、六八かあ…（背中が痒いらしい。モゾモゾと掻き始める）

栗林 ねえ、六八と七〇って二歳しか違わないよね。

橘 そうだね、二歳だね。

栗林 …二歳って何？

橘 私ら、二歳にこだわるよねえ。

桂木 こだわるねえ。

橘 こだわる、こだわる。

桂木 二歳は大きいわ。

橘 大きい、大きい。

桂木 六八歳と七〇歳は違うわ。

橘 ちがう、ちがう。

栗林 ね、ルリちゃんって、あの人に似てるよね。

橘 誰？

栗林 ホラ、あの人よ、あの人。

橘 だから誰？

栗林 えっとね、アレだ、ほら、あつたじゃない。小さい頃、あつたじゃない。

橘 何が？

栗林 日曜日の八時にあったじゃない。パーッと踊る人。

橘 踊るの？

栗林 そう、パーって踊った人いたじゃない…あ！水戸黄門！水戸黄門で…

桂木 ああ、東野英治郎？

橘 ええ！東野英治郎って踊るの？

栗林 なんでよ！ルリちゃんよ！ほら、お風呂入る人よ、いつもいつも、水戸黄門で…

橘 由美かおるか！

栗林 そ、そ！由美かおる！

橘 ええ？似てない、似てない！ルリちゃん、似てないよ。

栗林 違うよ。由美かおるじゃなくて、由美かおると一緒に踊ってた人よ…あ！思い出した！こうやって手を使う人よ。

橘 手を使うの？

栗林 手を使ってすっごく流行った人。

桂木 わかった！夏木マリだ！

橘 ああ、夏木マリ…

栗林 違うよ。夏木マリはこうでしょ。（手の動きをやってみせる）こうじゃなくて、こうよ。

橘 こう？

栗林 そうそう、こうやって、ダンダンダンダン！

橘 あああ！バンバンバンバン！

栗林 違う！バンバンバンバンじゃなくて、ダンダンダンダン！

桂木 ね、ねえ、それ思い出したからって、なんか利になる？

栗林 リ！？

橘 リ？

栗林 リって何よ！

橘 リって？リ？リ？

桂木 身、でもいいんだけど。

橘 ミ！？

栗林 何、ミって！

桂木 だから、それって、思い出しても利になったり身になったりするかって。「そうね、似てるね」

「そうねえ、似てないね」で終わる話だね。…ああ、痒い…私、この頃身体が痒いんだあ。
あの薬のせいだと思うんだけど。

栗林 何の薬？

桂木 ほら、あれ、ナントカっていう薬よ。

橘 ナニ？

桂木 だからさ、カバみたいのがいてさ。

橘 カバ？

桂木 そう、優しいカバ。カバ？ うん、カバみたいのがいてさ、アニメよ、アニメ。

栗林 アニメなの？

桂木 人間も出るんだよ。カバも出るし、ん？ あれネズミかなあ？

橘 ムツゴロウさん？

桂木 違うでしょう！ アニメだって。え〜っと、え〜っと…

橘 ドリトル先生か。

栗林 ドリトル先生？ あれカバ出た？

桂木 違う、違う。こっち、こっち（掻く箇所を指示しながら）あ！こっち向いて〜、こっち向いて〜

栗林 ああ、ムーミン！

桂木 ムーミン！！！！ そうムーミン…（痒みが治まった）ありがとうございます。

栗林 どういたしまして。

橘 ムーミンがどうしたの？

桂木 ん？ いや、違うよ、薬。薬の名前。

橘 ムーミン？

桂木 セルミン。

栗林 …ミンしかあってないじゃない。

桂木 夜中にね、眠ったかなあって思うと痒くて目が覚めるの、で、また眠ったかなあって思うと、痒くて目が覚めるの、で、また眠ったかなあって思うと覚めるの、トイレもそのたんびに行きしき。やっぱり薬のせいかな、眠ったかなあって思うと…

橘 それ、老人性乾皮症じゃない？

桂木 は？

橘 ロオジンセイカンピシヨウ。

桂木 ロオジンセイカンピシヨウ？

栗林 いやよねえ、老人性ってコトバ。

桂木 ロオジンセイカンピシヨウ…。

栗林 何にでも老人性ってつけるじゃない。

橘 老人性高血圧、老人性難聴、老人性膝関節症、老人性イボ…

桂木 若い人はどういの？

栗林 若年性じゃない。

桂木 ジャクネンセイかあ。

再び、音響チェックの音が入る。

劇中のダンスシーンの音楽につられて、一曲、踊ってしまう。

続けて、確認するように、それぞれの台詞を言ってみる。

その中で、桂木は携帯をチェックする。

橘 日も月もさらに三十度の旅路を続けてなお、私たちの愛に終わりがありませんように。それが

悲しいかな…：カッパカッパラッタ…カッパラッパカッパラッタ…カッテキテクッタ…

桂木 園ちゃん、お弁当？

栗林 マクドナルドのハンバーガー。

桂木 またあ？ アメリカ人になるよ。

橘 マックマックマックドナルド、カッテキテクッタ。カッパカッパラッタ…カッパナツパ…

桂木 佐和ちゃんは？

橘 カツパカツパカツパずし。お寿司食べて来た。笹寿司、巻き寿司、ちらし寿司。柿の葉寿司に
ますのすし…カツパナツパラッパ…

桂木 ほお、豪勢だねえ。私、出前取る。頼もう、ジャアジャア麺、ジャアジャア麺、頼もう〜
ジャアジャア麺！……Tomorrow is another day!!!

桂木、自分を元気づけるように勢いよく楽屋を出ていく。

橘 トウモロロー？

栗林 アナザーデー？…今日の占いで「最下位のあなたもジャアジャア麺を食べれば大丈夫」って
言ってたよ。

橘 ……ジャアジャア麺……ねえ、目、赤すぎだよね。

栗林 クマ、ありすぎだよね。

橘 いつも、顔洗わないで寝るからねえ。

栗林 ……今日、何日だっけ？

橘 あ、十一日！

二人 ……

二人が気がついたのは今日が桂木の誕生日だということだった。どうしよう、何も用意
していない……対策を考える間もなく、桂木が戻ってくる。

桂木 ヨシ、ヨシ、ヨシ。

橘 なに頼んだの？

桂木 ジャアジャア麵。今日のラッキーフードなんだ。

橘・栗 ふ〜ん。

桂木 ちよつと！ まだ舞監が来てないんだって！

栗林 うっそ、この前も遅刻してたよ。

桂木 なんかたるんでるよね。

橘 なんで遅刻？

桂木 知らないわよ。聞いてきてよ。

栗林 え！ 私があ？

桂木 私、今行ってきたもん。

栗林 もう〜もう〜もう〜！

桂木 モ〜モ〜モ〜モ〜って言ってるど牛になっちゃうよ！

栗林、桂木に押し出されるように出て行く。

桂木 なんで「モウモウ」なんだろうね。

橘 ブウブウじゃ、豚になっちゃうからじゃない。

栗林が戻ってくる。

橘　なんだって？

栗林　子どもに弁当作ってるらしいよ。

橘　はあ？

桂木　ああ、なんか奥さんに逃げられたらしいね。

栗林　今日、こどものお楽しみ会なんだって。

橘　それって関係ある？この芝居に関係ある？

栗林　関係ないけどさあ。

橘　私、行ってくる。

桂木　ええ、ちよつとやめなさいって！

桂木、栗林は橘を止めようとする。そこへ再び音響チェック。ダンス音楽が一瞬流れる。

三人、つい振り付けをなぞってしまう。

音楽が止まる。

三人、我に返る。橘が憤慨したまま出ていこうとするのを二人は止めようとするが、橘の勢いは止められない。

橘（声）

ねえ、やまちゃん！舞監まだ来てないんだって？なんか子どものお楽しみ会らしいじゃない。舞台とお楽しみ会ってなんか関係あるっけ？弁当作ってるって。弁当と舞台となんか関係あるっけ？早く起きればいいじゃないの？ねえ！弁当も舞台もしっかり……じゃなくて……舞台も弁当もしっかりやれって言っというてよね！

何かを蹴とばしたような音がする。

桂・栗
すごいよね。

桂木、栗林はその剣幕に圧倒されて身を小さくしている。

橘
ンもう、ホントに……「日も月もさらに三十度の旅路を続けてなお、私たちの愛に終わりがありませんように。私の愛が深ければそれだけ気づかいても深く」……

栗林
え？ ちよっと、飛んだ、飛んだ。

橘
え？ どこが？ だって「日も月もさらに三十度の旅路を続けてなお、私たちの愛に終わりがありませんように。私の愛が深ければ……

栗林
違う。

橘
だって「日も月もさらに三十度の旅路を」……

栗林
だから、ちよっと聞いて！ ね！「三十度の旅路を続けてなお私たちの愛に終わりがありませんように。それが悲しいかな、近頃〴〵気分の優れぬさま、以前とはすっかりお変わりになり」「それが悲しいかな」……え！ なんだっけ？……なんだっけ……ええと、ええと……あれ？ んもう！

舞監がワルイ！ あああ……わかんなくなっちゃった！

栗林
「近頃〴〵気分のすぐれぬさま」……

橘
あ！ ああ……「近頃〴〵気分のすぐれぬさま」

栗林
「以前とはすっかりお変わりになり」……

橘 ……おお！「気がかりでなりませぬ」！

栗林 それ正解！

橘 「とは言つもの、私の気がかりなどどうかお氣にかけてくださりますな。私の愛が深ければそれだけ氣づかいても深く、愛が大きければ小さな疑いも氣づかいとなり、小さな氣づかいは育つところ大きな愛が育つもの」

桂木 「苦いぞ苦いぞ、今の言葉は！」

栗林 「いいや。はかなきは人の心。定めたことをみずから破るもの。決意はしよせん記憶の奴隷に過ぎぬ、生まれるときは激しくとも、たちまち消え失せる。いまは熟さぬ果実のように枝にしがみついておるが、熟せばゆさぶられずとも地に落ちよう。うつろいやすきがこの世のならい。われらの愛とて時とともにうつろいゆくになんの不思議もあるまい」

橘 「いいえ、けつして。たとえ大地が食を恵まず、天が光を与えず、昼の楽しみ、夜の安らぎがこの身から奪われ、絶望が希望にとってかわろうと、誓って」

桂木 「その誓い、今に破りはしまいな」

栗林 「いいや。われらの意志と運命とはさからいあつて進み、われらの意図するところはくつがえされるがつかね。思いはわれらのものなれど結果はわれらのものにならず」

橘 「いいえ、けつして。たとえ喜びの顔を蒼ざめさせるありとあらゆるわざわいが私の大切に思うものにふりかかってこれを滅ぼし、この世はおるか、あの世まで永劫の苦しみがつきまとうおうと誓って」

桂木 「あの妃は誓いの言葉が多すぎるように思うけど」「なるほど。だが、誓ったからには守るでしょう」

「悲劇はどんなに美しく演じられても悲劇でしかないと、それが臣民の数多の涙を誘おうとも創られた蠟細工の物語で涙するよりも前に、この世界を覆い尽くす、本当の涙を観るがいい」

栗林 「あなたが始めたことだ」

桂木 「あなたが始めた賭けだ」

橘 「あなたが出した条件だ」

栗林 「あなたが嘆いても始まらないことだ」

桂木 ……ああ、気持ち悪い。ドキドキしてきた……………

三人、つい本番のおさらいをやってしまい、かえって緊張感と不安が高まってくる。
動き、台詞を再度確認する。

栗林 ……あなたが嘆いても始まらないことだ……でいいんだよね。

橘 うん…

栗林 ……「あなたが始めたことだ」…

桂木 「あなたが始めた賭けだ」…

橘 「あなたが出した条件だ」…

栗林 「あなたが嘆いても始まらないことだ」…

その言葉はいつか、遠い時の彼方の “記憶の底にある自分たち” を暗示する言葉に思えて来る。

時を刻む音が迫るように響く。

栗林 あなたが始めたことだ

桂木 あなたが始めた賭けだ

橘 あなたが出した条件だ

栗林 あなたが嘆いても始まらないことだ

三人 ……………

栗林 ……私たちが嘆いても仕方ないことだ…

三人はしづしづ納得したように現実の時の流れに戻る。

三人 ……………

桂木 もうくなんのバチがあたって、こんなことやってるんだろ。

栗林 これ、バチかな…

桂木 バチじゃないの…

橘 じゃあ、辞めればいいじゃない…

時計が無表情に時を刻む。

橘 「おかげで時間がたった」じゃない？

栗林 「そうでなくたって経つさ、時間は」でしょ。

桂木 「ああ、だが、もっと………」

橘 もっと？

栗林 もっと、何？

桂木 ……もっと………

栗・橘 ……

橘 ……前世でよっぽど悪いことしたんじゃないの。

桂木 私が何したって言うのよ。

栗林 業突く張りの置屋の女将さんだったんじゃないの。

桂木 お黙り！ 今夜もしっかり稼ぐんだよ！

橘 なるほどねえ、そういうことであるかもねえ。

桂木 （橘を見ながら）ねえ、佐和ちゃん、世が世なら佐和ちゃんって、お医者さんの奥さんだよね。

橘 お医者さんじゃないのね。

桂木 そう、お医者さんの奥さん。大学教授の奥さんでもいいんだけど。

橘 どっちにしても奥さんなのね。

栗林 ね、世が世ならって、どういう意味？

桂木 ああ、二つの道があって、こっちをやるだろうと思ったのに、何かの拍子にこっちをやっ

ちやっただよ。

橘 だったら、私、お医者さんの奥さんになれたってこと？ なりたくもないのに。

桂木 まあ、いいじゃない。

橘 よかないけど。

栗林 だから、世が世ならって、どういう意味？

桂木 だから、世が世ならって言うのは、この世じゃなかったら、別のことしてんじゃないかなってことよ。

栗林 ふ〜ん。この世じゃなかったら、あの世ってこと？

桂木 まあいいじゃない、そう固く考えなくたって。

栗林 固いって、どういうこと？

桂木 固いって、かったくいってことよ。

栗林 頭がグルグルする〜

橘が二人の化粧前の下まで潜り込むように何かを探している。

桂木 なに？

橘 …う〜ん、ちょっと…（思い詰めたように裏の方に走り込む）

桂木 ねえねえ、死ぬまで勘違いしたままのことってあるよね。

栗林 あ〜、私この間まで、ニュースイジサツって思ってた。海とかで死ぬやつ。

桂木 えっ？ 違うの？

栗林 ジュスイジサツ。

桂木 はあ？

栗林 「入」をジュとは読めないよね。

橘、さらに思い詰めたように戻ってくる。

桂木　なんでニュースイじゃだめなの？

橘　高飛び込みじゃ、ニュースイって言うけどね。

栗林、歯ブラシ片手に洗面所へ。

橘、探し続けている。

桂木　だから、何？

橘　消えたの。

桂木　何が？

橘　ひらひらチョーチン。

桂木　またあ？　ハンガーにかけてない？

橘　見た。

桂木　いっつもいっつも！

橘　いっつもじゃないもん！

桂木　昨日は髪飾りだったじゃない。

橘　あれは助監督さんが…

桂木　ハイハイ。

橘　何よ、アナタだって歯ブラシちゃんと元に戻しなさいよ。

桂木 戻してるわよ。

橘 靴箱の上に取りました！

桂木 あの歯ブラシは終わってから靴を磨こうと思ったの。

橘 ウソばかり！ だいたい食べかけのお弁当、冷蔵庫に入れるのやめてよね。

栗林 (奥から顔を出しながら) あら、ダメなの？

橘 は！？ 園ちゃんだったの？

橘、栗林を問いつめようと洗面所の方へ。

二人のやりとりの声だけが聞こえる。

桂木、携帯を気にしている。

栗林 だって食べきれないんだもん。

橘 コツツンコツツンだよ。

栗林 はあく？

橘 ポッサボサ。

栗林 何言ってるの？

橘 モッサモサ。

栗林 だから、何言ってるの？

橘 ポッサモサ。

栗林 モツタイナイ精神よ。

橘 (楽屋の方に戻って来る) だからモテないのよ。

栗林 モテないわよ。だから？

橘 赤いパンツ、ウエストまで伸ばして穿いてるしね。

桂木 あら、赤パンの何が悪いの？ 冷えないのよ。運がよくなるのよ。

橘 モテないわよ。(探し続けている)

桂木 ワタシは、モテるけど。なにか？

栗林 へええ。

桂木 “ダイヤル回して、手を止めた”わよ。

栗林 ほう。それ、モテてるって？

橘 あったあ！

栗林 どこに？

橘 :(履いているスカートをめくると、“ヒラヒラチョーチン”なる下着が見える)

桂木 もう、バツカじゃないの！ハンガーにかけといたら？

橘 申し訳ございませんでした。

栗林 毎度のことで。

橘 毎度のことでございます。

栗林 へい、毎度。

桂木 ダンナ、お頭付きのメザシが入ってますぜ。

再び、三人はその場限りの調子に乗りそうになる。
携帯が鳴る。すぐさま桂木が取る。

桂木 「はい、もしもし、あつ、悦子さん？ うんうん、いや、だから楽屋…えっ、ちょっと待って」

桂木、二人に話を聞かれたくないように楽屋から出ていく。

栗林 ……悦子さんって？

橘 お兄さんの奥さん。

栗林 何かあったのかな？。

橘 ……何だろ。

桂木、憤懣やるかたない気持ちをいっばいに抱えて戻って来る。

橘 どうした？

桂木 は？ あ…「え？ 楽屋？」だって…いやもう、アツタマに来ると思わない？ 「今、どこですか」って聞くから「楽屋」って言ったたら「え？ 楽屋？」って言われたのよ。「え？ 楽屋？」だよ！ 四十年芝居やってんのによ！ 「え？ 楽屋？」はないと思わない？ こっちは仕事してるっつーの。墓場にいるんじゃないのよ。「もしもし、今、墓場」って言ったんなら「ええっ？ 墓場？」って言うてもいいけど「え？ 楽屋？」だよ！ 「え？ 楽屋？」だよ。仕事してる人

に聞いてごらん、聞いてごらん！「今、仕事してんだけど」って言って「え？仕事？」って
言わないでしょ、なあ？あつたり前だつてえの。おつかしいよ！「え？楽屋？」だつて、
アツタマくる！人が仕事してものに「え？楽屋？」だつて！私が四十年芝居やってること
なんか知ってるんだよ。いつでも帰つてこれるって思つてんだよ！私が遊んでるって思つて
んだよ。親が危ないって言つたらすぐ帰れるって思つてんだよ。帰れないんだよ！

桂木、興奮して出て行く。二人はその姿を目で追う。時計の音が迫る。

橘
……お母さん？

栗林
……お父さん？

桂木、ラーメンを持って戻ってくる。

栗林、橘は自分たちが察している事を悟られないように、何気なさを装う。

栗林
…ねえ、タバコの自販機、どっかにあつたよね。

橘
ああ、あつた、あつた。サンワスーパーの横。

栗林
ああ、そうだった、そうだった。サンワつて…

橘
ほら、楽屋出て右に行つて、突き当たりを右に曲がつて…

栗林
あれ？右じゃなくて左じゃなかった？

橘
右だよ。ホラ。その階段降りるじゃない。

栗林 うん、四段。

橘 うん、で、外に出るじゃない。

栗林 うん、出るね。

橘 で、壁伝いにタッタカッタタカ行くじゃない。

栗林 うん、タッタカッタタカ、タッタカッタタカ：

橘 で、左に曲がると横断歩道があるじゃない。

栗林 で、渡る。

橘 すると：ほら、探偵社の看板！

栗林 ああ、黒い犬！ あった！

橘 耳が垂れてる：

栗林 そ、垂れてる、垂れてる。

橘 そこを右に曲がって：アッチよ！（指差す）

栗林 ：コッチよ！（指差す）

二人が勢いよく指差したのはアチラとコチラ。正反対をさしていた。桂木、おもむろにラーメンのラップを外し、食べ始める。

橘・栗 （口々に） え〜！ なんで？ …だから…いいから…こっち…

二人は桂木を一人にするべく、タバコにかこつけて外に出て行く。

桂木のラーメンを啜る音だけが響く。
何かを振り払うように食べ続ける桂木。

桂木 ……もったいなか、もったいなかって……バカみたい…恒子がくれたけんって…大事にせん
とって……箱に入れたまんまで…あのシャツ……いつか、何かあった時に着るけんって…財布
もベルトも靴も…ネクタイも……大事に使うけん、そのうち使うけんって……いつよ……そのう
ちって……使ってるの孫の手だけじゃない……「使わないうちに死んじゃうよ」って、私、
言ったよね………言ったでしょ………いつか着る、いつか使って………

時計の音が桂木の心を包むように広がる。

橘と栗林、桂木を遠巻きにしながら入って来る。

急ごしらえで買ったきたらしい形だけのプレゼント…コンビニの袋を手に行っている。

橘・栗

♪ハッピーバースデー♪トウ♪ユ♪、ハッピーバースデー♪トウ♪ユ♪、ハッピーバ
ースデー♪ディア 秀ちやくん、ハッピーバースデー♪トウ♪ユ♪…

二人が袋から取り出したのは、小さなヤクルトだった。思わずニッコリ。

桂木 ……あ、ホントだ。

橘 忘れるとキビシイから。

栗林 ね、いくつになった？ ね。

桂木 ウルサイ、ウルサイ：園ちゃんより1コ上：佐和ちゃんより1コ下。

三人 (笑い)

二人、乾杯を促す。三人で小さく杯を合わせる。

二人 おめでとうございます！

桂木 ありがとうございます！

三人 カンパニー！

まるでそれが合図だったかのように、三人は本番のための最終的な準備を始める。衣装をつけ、メイクを完成させていく。うってかわって、押し黙ったままの三人。その間も時は刻まれる。

時の狭間に何かを見つけたのか、見つけようとしているのか：

三人は、「楽屋」の先のどこかに吸い込まれるように彼方を見上げる。

これから向かう舞台に幸あれと、いつもの儀式：拳を合わせる。

本番に向かうすべての準備が整ったところに、桂木の携帯が鳴る。

桂木

(携帯の画面を見た後、やがて力が抜けたように下ろす) ……父さん…死んだ…

舞台の幕が開こうとしている。

台詞は暗示的に響く。

彼女達はどこから来て、どこへ行くのか？ 彼女達は何者なのか？

現実の時間を振り切るように、栗林、橘は舞台袖に向かう。

栗林 この大いなる“時”の奔流のただ中、何かが始まり、そして終わって行く。私たちの、この日々。

送別のために準備し、育む、この日々のなんと血の躍ることよ。

橘 いつか来る、いつか来る…この不安はきつといつか、あっけなくあたり前のようにやって来るに違いない。

栗林 こんなことは誰にでも起こる事だ。悲劇のどん底にいるわけではない。

二人は見る間に、まるで数多の年齢を重ねた様を呈していく。

橘 ここへ来て、ここから見て、初めてあなたのやっていることがわかったような気がします。あ

なたの詩が、あなたの声が聞こえるような気がします。もうしばらく、もうしばらくしたら

あなたの所に戻ろうと思います。

栗林 この私わたくしという存在が、広大無辺むへんの間によるべなく置き去りにされているのではないことを

この地球ほしの魂につながっていることを、ただ一条の光でいい、その先に知りたいのだ。

橘 だから、私たちは…

栗林 さようなら……

橘 ……さようなら…

栗林 さようであるならば…

橘 さようであるならば…

栗林 そうあらねばならぬのなら。

橘 そうあらねばならぬのなら。

二人 そうあらねばならぬのなら。

二人は、光が溢れ始めた舞台上が上がって行く。

桂木は自分で自分を抱き、一人、虚空の、その先に流れる時を見つめる。

そこに、触れられるかもしれない何か、掴めるかもしれないひとかけらを探しているように見える。

桂木 ……「見送りて 戻りし家に娘の脱ぎし スリッパ一足 ひそと残れり」…あの人は…あの人は

何をを見て、何を楽しいと感じていたのだろう。何をすると嬉しかったのだろう。あの人は、何が好きだったんだろう、何が嫌いだったんだろう。その時、“その時”は苦しくなかっただろうか……。「何だかおかしいじゃないか。世界は何も変わらないというのに。もう二度と逢

えない別れの日も陽射しは変わらないというのに「……………空を掴む手と、光を見つめる眼差しを持ったまま、あなたはどこへ逝くのでしょうか。また、いつかきつとあいまみえる時が来ることを祈ります。…さようなら、さようであるならば、そうあらねばならぬのなら…」

桂木、父親との永訣を心に秘め、静かに空を仰ぐ。
そうあらねばならぬのなら…。

その眼差しを、逝ってしまったすべての愛おしい人たちに捧げます。
いつかまた、どこかであいまみえることを祈りながら。

了

楽園の楽屋

初版

平成二十四年十二月五日

編集・発行

劇団青い鳥

印刷

プリントパック

イラスト

天光眞弓

© AOITORI

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前5-46-32 K S ハウス 301

TEL 03-3486-7727